

僕と弟とダウン症

映画「39 (サンキュー) 窃盗団」監督 押田興将^{こうすけ}

「ダウン症の青年が主演を演じる、意外と社会派? コメディ」とあるとおり、笑って泣ける映画が完成!

僕の弟の一人には、ダウン症があります。名前は、清剛^{きよたか}といいます。他、残り6人の姉弟は、ダウン症ではありません。

ここに、差別や区別があるかといえば、同じように虐めていたような気もするし、いつまでも子どものままの清剛を特にかわいがっていたという気もします。

姉と僕は、下の6人のオシメを替えたり、子守をしたりしていました。どいつもこいつも、お漏らしはするし、言うことを聞かないという点では皆一緒。かえて、大人しくて面倒を見るのは楽だったという記憶があります。

最近、妊婦の血液検査だけでダウン症診断が可能というニュースが飛び交っています。安全で簡易な方法ということで、検査を受けた中絶希望者の増加を危惧する内容でした。

この検査は、「こう生まれたら不幸だ」という社会通念のもとに行われるものです。そんな通念は、曖昧かついい加減なものだと思いつつも、その通念がかなり厄介な強者で、

僕たちは様々な社会通念に縛られて生きているというのが現実です。

「ダウン症として生まれたならば、ただちに不幸になる」という社会通念は存在し、子どもを不幸にたくないという子を思う親の気持ちから中絶を選択するのも、さして不思議なことだとは思いません。

清剛は、35歳になりました。立派なおっさんです。彼のこの35年は幸せだったのか。不幸だったのか。

それは僕にはわからないし、彼にもよくわからないと思います。僕にしたって、この43年間で幸せだったのか不幸だったのかと問われてみれば、よくわからないと答える他にありません。幸せや不幸はそういうものだと思います。

病気だから不幸、貧乏だから不幸、頭髪が薄いから、背が低いから、顔が悪いから、足が短いから……。不幸の定義をつくらうと思えば無限にあります。



映画のワンシーン。ヒロシと和代がキヨタカに盗みをさせようとしている場面



撮影の合間の本当の押田三兄弟。左から大さん、清剛さん、押田監督

病気でも貧乏でも背が低くても、すなわちそれが不幸であると定義した時点で不幸となります。しかし、その逆も然りで、幸福だって定義は無限にあるはずです。



僕は、清剛が好きだし、彼に出会えて本当に良かったと思っています。

もし、母が清剛を妊娠したときに、中絶という選択肢をとっていたら、自分の人生が変わっていたと思うほど、彼との出会いは自分の中では大きいものです。

今回、自主製作で撮った映画「39 (サンキュー) 窃盗団」は、僕の人生で大きな出来事であり、清剛がいなかったら、この映画も生まれていません。それを幸福か不幸かと問われれば、僕は迷わずに「彼に出会えて幸福です」と答えます。



今後の上映予定

- ◆11月17日(土)～
- ◆新宿 K'Sシネマ
(モーニングショー10:00～)
- ◆新百合ヶ丘 川崎市アートセンター

詳細はホームページで <http://39thankyou.com>

映画「39 (サンキュー) 窃盗団」あらすじ

ダウン症のある兄キヨタカ(押田清剛)、発達障がいのある弟ヒロシ(押田大)の兄弟。キヨタカの面倒を見ていたおばあちゃんも亡くなってしまった。三回目の懲役から戻ったヒロシは、またオレオレ詐欺のリーダー・ケンジ(斎藤歩)の元へ。ケンジは「お前の兄貴は、刑法39条があるから、何をしても刑務所に入れられることはないんだぞ」とそそのかされる。兄弟二人と、キヨタカの幼なじみで同じく発達障がいのある和代(山田キヌヲ)の3人は、ケンジの言うことを信じて、ドロボーの旅に出る。その旅の途中で巡り合う痴呆老人の金山(品川徹)もチームに加わった緊張感ゼロの「サンキュー窃盗団」の運命は……。

◆【刑法39条】

- 1 心神喪失者の行為は、罰しない。
- 2 心神耗弱者の行為は、その刑を減輕する。